

国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)  
長期方針(2018-2030)と中期計画(2018-2020)

2018年3月29日開催 IUCN-J 会員総会にて議決

1 改定の背景

国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)は、2010年の生物多様性条約第10回締約国会議(CBD COP10)を契機に大きく成長し、にじゅうまるプロジェクトなどの特別事業を運営するようになった。IUCN-Jとしてはじめて策定した「中長期計2012-2020\*」は、このCBD COP10の成果を受け、愛知ターゲットの達成を中心に据え、IUCN-Jとして2020年までに実施すべき内容を取りまとめたものである。

しかし、計画時(2012年)から、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の採択(2015年)や、「パリ協定」の採択(2015年)「仙台防災枠組」の採択(2015年)など、愛知ターゲット達成にも関わる国際目標が大きく変わった。自然保護活動を通じて、持続可能な開発・気候変動への緩和と適応・生態系を活用した防災・減災への貢献をはじめとする、世界の様々な問題に統合的に取り組んでいくことが求められる中で、IUCN-Jの中長期計画も改定すべきという認識でIUCN-J会員の意見が一致した。

改定に際しては、2017年9月27日、10月18日、11月14日の3日間に渡り、会員間での意見交換会を実施し、ドラフトを作成した。11月22日にIUCN-J会員会合を開催し、ドラフト案に対する最終ヒアリングを実施した。その結果に基づき、2017年度末の会員総会にて決定された。

※正式名称:「CBD-COP10/MOP5の成果を踏まえた国際自然保護連合日本委員会の共通見解と長期方針」

2 基本認識

長期方針(2018-2030)の策定は、関係者全員でIUCNのビジョン・ミッションを共有し、今後注力していく事業内容を定め、優先度の高い課題を解決していくために、IUCN-Jとしての貢献の総量を増大させていくことを狙いとしました。

IUCNのビジョン・ミッションの達成を目指す上で、IUCN-Jが注力する内容は、下記4点を基本とする。

- 「会員」は、IUCNのビジョン・ミッションを目指し、それぞれの活動を加速させていく
- 「会員」が活動を加速させていくために必要な、会員や専門委員・IUCN-J事務局が持つ国際的な情報の整理と提供・発信や、IUCN-Jとして共有する場づくりなどは、「事務局」が支援を担うことで、「会員」の活動が効率よく伸びる環境づくりをする
- 会員単独では出来ず、多様な会員で補完し合いながら実施する活動に関しては、「事務局」が調整を行い、IUCN-Jとして実施する可能性がある(例:にじゅうまるプロジェクト)
- 貢献の総量を増大させていくため、「会員」の数も増加させていく

長期方針は、2018年-2030年間の長期的な方針となるが、必要に応じて見直しを行う。

中期計画は、2020年度までの計画である。今後、3~4年の期間で設定することとし、次期中期計画に関しては、2018年-2020年の活動成果・進捗や、IUCN世界自然保護会議2020、生物多様性条約COP15等を考慮しながらIUCN-J会員間で議論し、適宜必要な改定を行っていく。

### 3 長期方針(2018-2030)

#### 3.1 ビジョン・ミッション

IUCN-J は、下記、IUCN のビジョンとミッションを改めて確認する。

ビジョン

A just world that values and conserves nature.

自然の価値を認め、守る公正な世界

ミッション

Influence, encourage and assist societies throughout the world to conserve the integrity and diversity of nature and to ensure that any use of natural resources is equitable and ecologically sustainable.

自然の完全性と多様性を保全するため、あらゆる自然の利用を公正で、生態学的に持続可能なものとするために、世界中の社会に影響を与え、勇気付け、支援する

※検討の結果、IUCN-J のビジョン・ミッションは、IUCN と同一であるべきとの意見がまとまったため、同一のものとする

#### 3.2 活動目的

IUCN のビジョン・ミッションの達成に向け、日本からの貢献の総和を増大させていく

#### 3.3 解決すべき課題

IUCN-J が、長期方針の元、その活動を通じて解決したい課題を以下に掲げる。

- ① IUCN のビジョン・ミッションの達成を目指す日本のコミュニティが小さい
- ② 持続可能な開発・生物多様性保全に関する世界の情報・多様なセクターの情報があるが、アクセスが難しい
- ③ 愛知ターゲット・ポスト愛知ターゲット・SDGs・パリ協定・仙台防災枠組などへの、日本の環境分野からの関与が弱い

#### 3.4 活動目標

2030 年を目標年とした、IUCN-J の活動目標は以下に掲げる。

- ① IUCN のビジョン・ミッションに共感する団体・個人が増えている
- ② IUCN-J の活動が、会員間および海外・他セクター (IUCN メンバー・調査研究・企業・IUCN 専門委員・法曹界等) との交わりの場 (プラットフォーム) となっている
- ③ 様々な主体との交流を通じ、愛知ターゲット・ポスト愛知ターゲットのような生物多様性に関する国際的な枠組みや、SDGs・パリ協定・仙台防災枠組などの生物多様性保全を超えた持続可能な開発に関する国際枠組みなどに対し、IUCN-J メンバーがより関与を高めている

#### 4 中期計画(2018-2020)

##### ① IUCN のビジョン・ミッションに共感する団体・個人の増加

- IUCN-J のサポーターを定義し、拡大していく仕組みの検討を行う。その中に、政界・財界・ユース団体も活動サポーターとして位置づけられるような仕組みづくりを行う
- 専門委員会所属の大学の先生経由などで、関係するユースを増やし、各会員とのつながりを作ったり、関係するユースが集まれる場作りを行う
- おりがみアクションを通じて、生物多様性の大切さを個人にも伝えていく(オリンピックなども契機として使っていく)
- 英語/WEB での発信を強化する

##### ② 会員間および海外・他セクターとの交わりの場(プラットフォーム)の創出・増加

- にじゅうまるプロジェクトの活動を加速させる
- IUCN-J と、IUCN の 6 つの専門家委員会に所属する専門委員との連携の仕方を検討し、実施する(例:IUCN-J の会合に各委員の方から参加頂く など)
- にじゅうまるプロジェクトで多く宣言されている内容などからテーマを抽出し、集中的なテーマを設けて、IUCN の 6 つの専門家委員会からアドバイスを受けながら、ガイダンスなどを作る
- にじゅうまるプロジェクトの成果評価を行う
- メンバー間での活動報告会を実施する
- 日中韓 IUCN 会員会合の枠組みを活かした連携を促進する
- 国立環境研究所との MoU を活かし、研究分野と NGO などを繋ぐ取り組みを活性化していく
- 関係学会との連携について検討する

##### ③ 生物多様性に関する国際枠組みや、生物多様性を超えた持続可能な開発に関する国際枠組みなどに対し、IUCN-J メンバーからの関与を高める

- にじゅうまるプロジェクト等を含む日本の取り組み発信・ポスト愛知ターゲットに対する提言・IUCN へのインプットなどを目的とし、関連性の深い国際会議(生物多様性条約・IUCN の会議など)に参加し、国際的な情報収集を行う
- 生物多様性条約事務局との MoU を活かし、効果的な国際連携を実施し、国際的な情報交換を促進する)
- 国際会議前後・期中に、IUCN 会員間での意見交換・報告会を実施する
- 他セクター(SDGs 市民ネット・気候関係のネットワーク)との情報交換や協働を通じ、国際会議への参加意義を最大化する手法を検討し、実行する
- 他セクター・他分野との交わりの機会となるようなテーマでのセミナーや勉強会を開催する
- 課題解決のためのテーマ設定をした活動を、IUCN-J 内でのワーキンググループ立ち上げなども視野に入れながら活性化していく

# 国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)長期方針(2018-2030)と中期計画(2018-2020)

